堀とともに生きる町　―柳川を訪ねて

企画調査部主事　小林　千夏

西鉄柳川駅に降立った時はあいにく春の雨だった。改札を出るとすぐ、この町の生んだ文豪北原白秋の「からたちの花」の詩碑に出迎えられてほっと息をつく。

柳川といえば、堀に沿って柳が垂れ白いなまこ壁や倉が立並ぶ、情緒溢れる水郷である。ドンコ舟での川下りは柳川の風物詩だ。そぼ降る雨が水面を打って、あたかも日本画の中に迷い込んだ気分になる。川下りの乗船場辺りなどは歴史の薫りがよく残され、まるで時代劇のセットのようだ。しかし、昨年夏の渇水の影響で水量が例年より少なく、柳川堀の水位もかなり低く、現在川下りの遊覧コースも変更されているそうだ。

ところで、柳川堀はそれ自体は河川ではなく、近くを流れる沖端川から水を引いている。沖端川が属する一級河川矢部川は、流域面積620㎢幹線流路延長61㎞で有明海へと注ぐ。

また、沖端川・柳川堀は昭和63年度に『ふるさとの川モデル事業』において指定を受け、平成３年度に整備計画の認定を受けている。これにより五箇所のゾーンごとに柳川堀と町づくりが一体となった水辺空間が創出される。

柳川堀は、1600年、筑後三十三万石の城主田中吉政によって築かれた、柳川城の外濠・内濠の名残である。柳川の歴史は堀の歴史ともいえるように思われる。この町は平坦な土地で現在城跡は高校になっており、気を付けていないと通り過ぎそうだ。

柳川市は福岡県南西部に位置する、ムツゴロウで有名な有明海の干拓地で、稲作中心の農業が主体だ。西鉄大牟田線で久留米を過ぎると、車窓から水田のあちこちにクリークが現れ始め、柳川が近いことを知る。また、もう一つの顔は沖端の漁業だ。海苔の養殖が盛で、有明海での漁業にも歴史がある。矢部川の中流域はおいしい八女茶の産地だ。これら柳川の歴史については、川下り乗船場から少し歩いた所にある、なまこ壁の美しい歴史民族資料館で見学することが出来る。

資料館に併設された白秋記念館・生家には、筑後一の海鮮問屋にトンカジョン（柳川語で長男）として生まれ、異国情緒豊かな詩心を育んだ思い出の品々や、多数の詩歌などが展示されている。子供の頃よく歌った童謡の数々が彼の手によるものと知り、柳川という町に親しみが湧いてくる。白秋が20年振りの里帰りに際して作った「帰去来」は、自身も学んだ矢留小学校西側の堀近くに詩碑となって立てられている。散策していて興味を引いたのは、すぐ裏手の大神宮入り口脇の門の付いた階段だ。手を清める為の場所らしいのだが、こういった所にも堀を利用していることに堀と住民との密接な繋がりが感じられる。

乗船場近く、「御花」の愛称を持つ松濤園は鹿鳴館スタイルを構える美しい洋館だ。柳川城主だった立花家別邸で中は博物館になっている。表側は完全に洋風建築だが、裏側は思いもよらず立派な日本家屋のお屋敷と素晴らしい日本庭園が広がり、松島を模した池には数百羽の野鳥が戯れている。縁側に腰掛けしばし旅の足を休めるのもいい。一休みしておなかが空いたら、名物の「うなぎせいろ蒸し」「柳川鍋」をお勧めしたい。ご存じの通り浅草近辺の下町でもこの「柳川鍋」が名物だが、こちらがその発祥の地である。

柳川の町は有明海の海成沖積による平らな低地のため、古くから洪水などの水害に悩まされ続けてきた。柳川の形容詞ともいうべき堀割が雨水を一時貯留して洪水を防ぎ、また、低湿地の乾田化をも図っている。旅人にとってはあくまで観光の目玉である堀も、住民にとっては生活を守るための必要不可欠なものだった。堀の維持・保護に努め、ゆったりとした時の流れで歴史のままに生きる町。人々の息遣いを身近に感じ、優しい雨に打たれながら、白秋の童謡「雨ふり」を口ずさんでいた。